



永遠の絆

～連綿と続く長崎と中国の物語～

日本の西の端に位置する長崎県は、よく「異国情緒溢れるまち」と表現されます。それは、17世紀から19世紀にかけて、江戸幕府の対外政策（いわゆる「鎖国」政策）によって、日本人の出入国が原則として禁止され、貿易が管理・統制・制限されていた時代に、長崎は中国やオランダとの交易の場となっていたことが影響していると言えるでしょう。長崎は、幕府が直接管理して貿易を行う唯一の場所であり、そこにはさまざまな文化がもたらされました。

現在、16世紀後半から異国との文化交流を通して独自の発展を遂げた長崎の文化を、異文化との折衷文化という意味で、和（日本）、華（中国）、蘭（オランダ）から一文字ずつ取り、「和華蘭文化」などと言われることもあります。

また、地理的に東アジアに近い長崎県は、それよりもずっと昔、紀元前から中国大陆や朝鮮半島と深い関わりをもってきました。

なかでも、中国との交流において、多くの思想や知識、芸術や建築技術など、様々な文化が数えられないほど多くの人々の往来によって長崎にもたらされました。これらは、人から人へ、時代から時代へ脈々と受け継がれ、こうした中国色あふれる多彩な文化が、いまでも、長崎の人・街・暮らしのなかに深く、そして自然に根付いています。このような場所は、きっと日本中を見渡しても他のどこにも存在しないでしょう。

しかし、それは決して中国文化そのものではありません。これまでの歴史の積み重ねの中で、少しずつかたちを変えて成立した独自の「長崎文化」なのです。

そして、この「長崎文化」は、多くの人々の海を越えた絆の歴史でもあります。先人たちの思いに心を寄せ、その足跡を辿りながら、連綿と続く長崎と中国の生きた物語を感じてください。

※本冊子は日本と中国の史料を基に、主に中国の方に長崎と中国とのゆかりを紹介することを目的として作成したものです。

目次

略年表	3
特集1：偉人たちの足跡を長崎で巡る	
長崎生まれの英雄、鄭成功	4
黄檗宗の開祖、隠元禅師	8
長崎で花開いた絵画の世界	12
孫文と梅屋庄吉～国境を越えた友情物語～	14
真言密教を開いた遣唐使、空海	18
特集2：長崎と中国 人と文化の交流譚	20
中国より中国を感じられる?! 長崎に溶け込んだ中国の年中行事	24
地図：長崎市内地図	26
アクセス：日本列島、中国大陆の地図と主要アクセス	28

略年表

日本		中国	
西暦	重大事件	西暦	重大事件
630	遣唐使の派遣開始 (P.18)	618	李淵(高祖)が唐朝を建て、長安を都とする
804	空海・最澄、遣唐使として入唐 (P.18)	755	安史の乱勃発
894	遣唐使廃止	907	朱全忠が唐を滅ぼす
12世紀中頃	平氏による日宋貿易	960	趙匡胤が宋(北宋)を建国
1401	日明貿易開始(室町幕府3代将軍、足利義満)	1368	朱元璋(洪武帝)、南京で明朝を建立
1568	織田信長、入京	1403	永楽帝、北京を国都と定める
1573	室町幕府の滅亡	1421	明朝、事実上北京へ遷都
1590	豊臣秀吉、天下統一	1555	戚繼光、山東から浙江に転任し、倭寇と戦う
1603	徳川家康、江戸幕府を開く	1636	太宗(ホンタイジ)、国号を清と改める
1620	長崎興福寺創立 (P.11)	1644	清、首都を北京に遷し中国全土へ支配拡大
1624	鄭成功出生 (P.5)	1644	華中、華南にて南明が建てられる
1628	長崎福濟寺創立 (P.11)	1646	鄭成功、清朝への抵抗運動開始 (P.6)
1629	長崎崇福寺創立 (P.11)	1654	隠元禅師、日本へ渡る (P.8)
1630	鄭成功、平戸を離れ福建に移る (P.6)	1661	鄭成功、オランダ人を台湾から追放、鄭氏政権を樹立 (P.7)
1639	ポルトガル船来航禁止、オランダと中国だけ来航を許される (P.9)	1662	南明政権全滅・鄭成功死去 (P.7)
1644	逸然性融来日 (P.12)	1724	清の雍正帝、キリスト教の布教を禁止
1654	隠元禅師来日、黄檗文化伝来 (P.8)	1796	白蓮教徒の乱勃発
1661	隠元禅師、京都の宇治で黄檗山萬福寺を創立 (P.9)	1840	アヘン戦争勃発
1676	向井元升、長崎立山書院を創立 (P.20)	1851	太平天国の乱
1677	長崎聖福寺創立 (P.11)	1856	アロー号事件発生、第二次アヘン戦争勃発
1689	長崎に唐人屋敷が設置される (P.9)	1861	洋務運動開始
1731	沈南蘋来日 (P.12-13)	1864	太平天国滅亡
1853	黒船来航、翌年日本開国	1866	孫文出生 (P.14)
1867	明治維新	1881	ロシアとの間でイリ条約を締結
1869	梅屋庄吉出生 (P.14)	1884	清仏戦争勃発
1875	三菱汽船、横浜-上海間に定期航路を開設 (P.22)	1894	日清戦争勃発 (P.23)
1885	内閣制度採用	1895	下関条約締結、清が朝鮮の独立を承認
1893	長崎孔子廟創立 (P.20)	1898	戊戌の変法
1894	日清戦争勃発 / 孫文、興中会を創立 (P.14)	1900	義和団事件
1895	下関条約 / 孫文、日本に亡命 (P.16)	1911	孫文らによる辛亥革命、清朝が瓦解へ
1913	孫文、国賓として来日し、長崎を訪問 (P.15)	1912	中華民国成立 / 孫文、臨時大總統に就任

偉人たちの足跡を 長崎で巡る

長崎生まれの英雄、鄭成功

鄭成功(ていせいこう) [1624-1662]

父、芝龍と長崎

鄭成功について語るなら、その父の鄭芝龍(1604-1661)から始めなければならないでしょう。鄭成功の父・鄭芝龍は日本、特に長崎と深いつながりがあるのです。

現在の福建省南安市に生まれた鄭芝龍は、18歳で家を出て、母方のおじである黄程を頼り、海上ビジネスに携わりました。後に、日本と中国を往来するようになると、対外貿易の拠点の一つであった平戸(長崎県)の川内浦に



媽祖像(17世紀初頭)
鄭成功記念館(長崎県平戸市)
所蔵。像高は約28cm。鄭成功
の誕生を喜んだ父芝龍が職人
に作らせたと言われている。



鄭成功記念館

鄭芝龍一家が住んでいたとされる場所にあり、敷地内には、鄭成功が植えたと言われる樹齢400年のナギの木や鄭成功子孫第11代の鄭万進氏デザインの鄭成功母子像がある。

住所：長崎県平戸市川内町1114番地2
開館時間：8:30～17:00
料金：無料
休館日：毎週水曜日、12月31日～1月1日
電話番号：0950-24-2331
日本語ホームページ：
<http://www.hirado-net.com/teiseikou/>



住むようになりました。中国・日本・東南アジアを股にかけた鄭芝龍の巨大な海上事業の日本での拠点が、長崎県の平戸だったのです。

当時の平戸には、オランダやイギリスが、徳川幕府から貿易を許可されて商館を設立していました。また、中国(明朝)では海禁政策によって自由な貿易が認められていませんでしたが、日本や東南アジアまで活躍の場を広げていった中国人海商がいました。そのなかには、顔思齊(漳州出身)や李旦(泉州出身)など、平戸を拠点として活動していた者もあり、鄭芝龍は彼らの後を引き継いでビジネス手腕を発揮することになります。鄭芝龍は、マカオなどで手に入れた生糸・絹織物、黒・白砂糖や土炭(漢方薬)など薬種を日本に運ぶだけでなく、日本の商品をルソン島に運んだり、さらにスペインに転売したりして、わずか数年の間にオランダ東インド会社のアジア貿易最大の競争相手となっていったのです。その勢力は、明朝でさえ軽視できないものになり、経済・政治・軍事で最強の実力を持つ海外ビジネスマンでした。

鄭芝龍と田川マツの出会い

鄭芝龍は、平戸に住んでまもなく、肥前の国平戸藩の藩士・田川七左衛門の娘、田川マツと出会い、夫婦となります。その後、1624年のある日、海辺で貝を拾っていたマツは、にわかに産気づき、千里ヶ浜の巨石(鄭成功児誕生石)に寄りかかって、子を産んだと伝えられています。オランダ東インド会社が台湾にゼーランディア城を築城し始めたのと同じ年のことです。その子は「福松」と名付けられ、成長し、英雄・鄭成功となります。

現在、鄭芝龍一家が住んでいたとされる場所には、「鄭成功記念館」が建てられており、鄭成功ゆかりの品や一家の当時の生活空間などが展示されています。

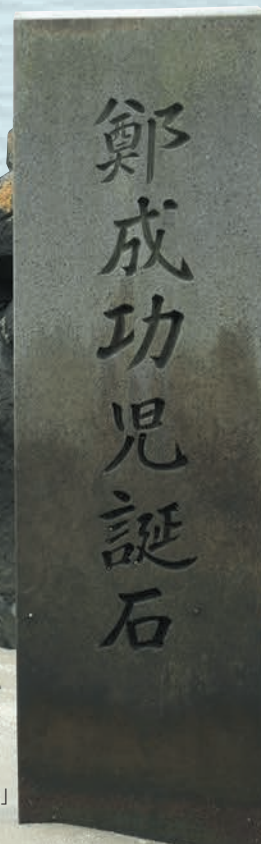
また、鄭成功記念館のそばには、樹齢約400年の大きなナギの木が立っています。地元、平戸市川内町の人によると、この木を植えたのは、鄭成功本人だということです。このほか、記念館の中には貴重な媽祖像が安置されており、これは鄭成功が生まれたときに鄭芝龍が子供の成長を祈って祀ったものだと言われています。

父・芝龍は、福松が生まれてまもなく、顔思齊らとともに平戸を離れ、中国東南部沿岸を舞台として活躍しました。ただ、時折平戸にも帰ってきていたことは、5年後にマツとの間に2人目の男子が生まれていることからわかります。福松の弟は、のちに祖父と同名の七左衛門を名乗り、田川家を継いでいます。

教育熱心だった母・マツ

福松は、幼い頃、母・マツと祖父・田川七左衛門に育てられました。武士の娘だったマツは、福松に、平戸藩の剣術指南役のもとで二刀流の剣術を学ばせ、また、鄭芝龍が遣わした老学者から、漢字と中国文化を学ばせました。武術と学問、両方をよく学んだ福松は、文武両道の優秀な子供だったと言われています。

このような環境で幼少期を過ごしたことが影響してか、福松は、後に、侵攻する清軍と最後まで諦めずに戦う、英雄・鄭成功へと成長していくのです。



鄭成功、単身中国へ渡る

1630年、鄭芝龍は、7歳になった福松を中国に迎えるため、平戸に使者を送ります。しかし、母・マツは、福松と乳飲み子の弟を抱えて、夫・芝龍のもとに行くことが許されず、鄭芝龍の長男で、鄭氏を嗣ぐべき身である福松を、ひとり中国へ送り出しました。そのとき、鄭芝龍は、すでに中国東南沿岸で大きな軍勢力も備えた海商に成長し、明朝政府から福建省の海防を担う職を任されていました。泉州安平城を拠点に活動する鄭芝龍のもとで暮らすようになった福松は、名を鄭森と改め、家庭教師に付いて論語、詩経、孫子など勉学に励みました。並外れた記憶力の持ち主だったといえます。1644年、21歳になった鄭森は、勉学に励んでいた南京で北京の明朝政府が崩壊するという報せを受けました。明朝の官僚となっていた鄭芝龍は、日本に満洲族の蜂起を伝えて援軍を要請すると同時に、妻・マツを呼び寄せる使者を平戸に派遣しました。時に、1645年のことです。日本人の海外渡航が厳しく制限されるなかで、日本の徳川幕府はマツの中国行きを許可し、マツは単身で夫・芝龍と息子・鄭森が待つ泉州安平へ渡って行きました。ようやく、鄭森は母・マツとの再会を果たすことができたのです。二人が分かれてから、実に15年ぶりのことでした。

国姓を授かった男「鄭成功」の波瀾に満ちた抗清復明運動

鄭森が、母・マツとの再会を果たした頃、南明の唐王朱聿鍵（即位後、隆武帝）が福州に逃れて帝位につきます。そして、隆武帝は、政権の建立に功績があったとして、鄭芝龍を平国公に封じました。また、父芝龍を介して隆武帝に謁見した鄭森は、隆武帝に気に入られ、皇帝の姓（国姓）である「朱」と、明朝の再興に尽力すれば必ず成功する

鄭成功記念館(媽祖像)
鄭成功居宅跡
長崎県平戸市川内町 1114-2



ナギの木



鄭成功母子像

鄭成功廟
長崎県平戸市川内町 丸山公園内



鄭成功児誕生石
長崎県平戸市川内町



松浦史料博物館(鄭氏系印)
長崎県平戸市鏡川町 12



① 鄭成功記念館(生家)

↓ 徒歩 (7分)

② 鄭成功廟

↓ 徒歩 (9分)

③ 鄭成功児誕生石

↓ 徒歩 (5分)

④ 千里ヶ浜鄭成功記念公園

↓ バス (14分) 「千里ヶ浜」乗車、→ 徒歩 (6分) 「平戸棧橋」下車

⑤ 松浦史料博物館(鄭氏系印)

鄭成功
記念館
からの
目安

千里ヶ浜鄭成功記念公園(鄭延平王慶誕芳跡)
長崎県平戸市川内町



だろうという意味で、「成功」の名を授かります。しかし、国姓である朱姓を名乗るのは恐れ多いと考えた鄭森は、その後も、鄭姓を使用し、以後、授かった「成功」の名と併せて、「鄭成功」と名乗るようになります。

しかし、1646年、清軍が福建省に侵攻してくると、隆武帝は清兵に殺されてしまいます。その後、鄭芝龍は、鄭成功が止めるのも聞かず、清朝に投降してしまいます。

同年11月30日、清軍の攻撃による泉州安平城陥落に際し、マツは、降伏することなく城内で自害したと伝えられています。享年45歳でした。

鄭成功は、生母の非業の死と明朝の滅亡に直面し、憤然として兵を起こして率い、抗清戦争を開始しました。その後、鄭成功は福州や廈門を中心に抗清の戦いを指揮し、1659年に南京攻略を試みますが、もう一步のところで攻略できませんでした。2年後の1661年には、台湾に入植していたオランダ軍を駆逐し、台湾を本拠地として捲土重来を図りますが、翌年、熱病のため39歳という若さで無念の死を遂げました。

長崎奉行による鄭成功支援

この間、鄭成功はたびたび長崎奉行を通じて日本に軍事援助を要請しますが、日本からの援軍は出されませんでした。しかし、長崎奉行や長崎の人々は武器・武具の輸出に便宜を図ったともいわれ、また、鄭成功支配地で流通させる銭を鑄造するなどして援助しました。

異例の大ヒット作品人形浄瑠璃『国姓爺合戦』の主人公「鄭成功」

鄭成功の死後、50年余り後、当時の日本で最も人気を博した脚本家である近松門左衛門は、鄭成功をモデルとした脚本「国姓爺合戦」(近松は「国姓爺」を「国性爺」と記している)を書きました。それは、1715年に人形浄瑠璃として上演され、17ヶ月連続上演というロングラン、異例の大ヒットとなり、後に、歌舞伎でも上演されました。近松によってフィクションに仕立て上げられてはいたものの、英雄・鄭成功の物語は、当時、多くの日本人が知るところとなったのです。

福建省南安市の鄭成功廟に祀られる鄭成功と母マツ

現在、福建省の南安市には鄭成功記念館があります。記念館の祭壇の最上部には国姓爺の母田川マツの彫像が安置されており、彫像の背後には堂々たる鄭成功の像が立っています。そこは、彼らの名を慕って訪れる人が絶えることはなく、人々は彫像の前で足をとめ、英雄とその母・マツを仰ぎ見えています。



南安市にある鄭成功廟

南安市の鄭成功廟に祀られる母マツおよび鄭成功の像

黄檗宗の開祖、隠元禅師

隠元隆琦（いんげんりゅうき）【1592-1673】

明代末期から清代初期にかけて、福清の黄檗山万福寺で住持（寺を管理する主僧）を務めた禅宗の僧。俗名は林曾炳。江戸時代初めに日本に渡って「黄檗宗」を開き、日本三禅宗の一派の開祖となる（三禅宗は他に臨済宗、曹洞宗）。日本の煎茶道の始祖でもある。また、隠元禅師はその功績により、遠忌ごとに日本の天皇から国師号や大師号を賜与されている。大光普照国師（1673年）、仏慈広鑑国師（1722年）、径山首出国師（1772年）、覚性円明国師（1822年）、真空大師（1917年）、華光大師（1972年）。

仏教伝来の由来

仏教はインドから中国に伝えられた後（北伝仏教）、天台宗、華嚴宗、律宗、法相宗など様々な宗派を生み、東アジア各国に広がっていきました。隋、唐の時代には日本から大勢の遣隋使、遣唐使が外交使節として派遣されてきましたが、その使節には仏教を学ぶための留学僧も含まれていました。彼らによってもたらされた中国の仏教は、その後の日本の仏教発展の基礎を築きました。例えば、804年に入唐した空海（弘法大師、774-835）は密教を学んで日本へ伝え、真言宗を開きました。空海がもたらした唐代の密教について、中国ではほとんどの資料が途絶えたものの、日本には真言密教として残されています。このことにより、最近、中国でも空海が注目されているようです。

長崎の唐人たちの強い思いに伝え渡来した、高僧「隠元禅師」

宋、元の時代には禅宗が日本に伝わり、日本の禅宗の主な宗派が形成されました。明代以降、中国の仏教は全面的に衰退しましたが、それから200年以上経過した明代末期から清代初期にかけて、仏教は復興期を迎えました。中でも、江蘇省、浙江省、福建省などの東南部では、特に仏教が盛んになり、再び日本に多大な影響を及ぼすようになりました。この時、日本への仏教普及に重要な役割を果たした人物こそ、現在の福建省福清に生まれた隠元禅師なのです。

福清は日本、特に長崎港との海上貿易による往来が頻繁に行われた地域でした。17世紀の始め頃、長崎には、すでに2000人から3000人程度の中国人商人がいたと言われています。

17世紀中頃には、さらに多くの中国人商人が長崎に来ていたと考えられていますが、仏教を厚く信仰していた彼らは、福清の黄檗山万福寺で住職を務めていた隠元の来日を強く招請しました。

黄檗山万福寺は、寺の再建に尽力した隠元の功績により中国東南部の名刹となっていたため、彼には他に類がないほど大勢の弟子がおり、その名声は長崎に住む中国人僧侶の間にも広がっていたのです。

隠元は、長崎の興福寺第三代住持だった逸然性融（1601-1668）らからの度重なる招請を受けました。逸然は、最初商人として1644年に来日し、のちに出家した中国人僧侶です。逸然は、はじめ、隠元の弟子・也懶性圭を招請したのですが、来日しようとした船が遭難して也懶は客死してしまいます。次いで、也懶の師・隠元の招請に乗り出すのですが、隠元は当初、健康上の理由や年齢を考慮して来日を断わります。しかし、再三再四の招請によって、1653年、ついに日本へ行く決意を固めたのです。翌年1654年、ついに16名の僧侶のほか、工匠らを率いて厦門から出航し、長崎に向かいました。隠元63歳のときのことです。ちなみに、このとき隠元が乗ってきた船は、鄭成功が仕立てたと言われています。1654年7月に長崎に着いた隠元は、その後、長崎の興福寺と崇福寺で約1年を過ごしました。

新しい禅宗の日本への伝来を熱望する多くの中国人僧侶たちの度重なる懇請により、長崎へと渡った隠元。彼が興福寺で法会を開くと、長崎中で大反響を呼び、その名声を聞いた日本の禅僧たちも、多く長崎に集まりました。



隠元禅師
（長崎歴史文化博物館蔵）



唐寺での読経の様子
焰口施食儀「長崎古今集名勝図絵」下
天保12頃（長崎歴史文化博物館）

黄檗宗の開祖、隠元

来日した隠元は、仏教を広めるために中国から日本へ渡った使者として、長崎の興福寺と崇福寺、摂津（現在の大阪府高槻市）の普門寺に相次いで滞りました。1659年には、江戸幕府から京都の宇治にある一万坪の土地を賜り、新たな寺院を建立。当時の中国の寺に倣って建てられたこの寺は、隠元の故郷、福清の寺と同名の「黄檗山萬福寺」と命名されました。こうして隠元は「黄檗宗」の開祖となったのです。隠元には、もたらした宗派が本来「臨済正伝」であるという強い自負がありましたが、日本には栄西が伝えた「臨済宗」が定着しており、「禅宗黄檗派」と呼ばれました。そして明治時代以後、「黄檗宗」と呼称されるようになりました。1673年、示寂の際には後水尾上皇から「大光普照国師」の称号を授かるなど、幕府のみならず天皇家からも尊崇を受けました。

隠元禅師と長崎の唐人さん ～国際都市「長崎」が引き寄せた新たな出会い～

隠元が来日し、多大な功績を残すことができたことは、長崎や長崎在住の中国人とも深い関係があります。徳川幕府の対外政策によって、オランダ船と中国船が寄港できる港は長崎に限られていました。もし長崎がそうした貿易港でなかったら、これほど多くの中国人が長崎に集まることはなかったでしょう。1689年、長崎に中国人居住区、いわゆる「唐人屋敷」が設置されると、大勢の中国商人・船員がここに住むようになりますが、それ以前は長崎市中のあちこちに住むことが許されている状況でした。

彼らは長崎に中国式の寺を次々に建立しました。1620年代に創建された興福寺、福濟寺、崇福寺は、あわせて「唐三カ寺」と称されています。さらに、1677年に創建された聖福寺を加えて「唐四ヶ寺」ともいいます。長崎にこうした寺が多く存在していたからこそ、隠元の来日が実現したと言っても過言ではありません。



当時、唐人屋敷は周囲を練堀や竹垣等で囲まれ、唐人や一部の限られた人しか入ることができず、唐人屋敷と外界との結界として唐人屋敷門が立っていた。この絵図は、大門と二ノ門の間の様子を描いたもので、二ノ門（内門）は役人でもみだりに入ることはできなかった。

唐蘭館絵巻 唐館図
“唐館表門図”／川原慶賀筆
19世紀
（長崎歴史文化博物館蔵）



唐人屋敷象徴門（大門）

2015年3月、長崎市館内町入口部に高さ約8.7mの中華門が建設され、唐人屋敷跡を象徴する新たな目印となっている。

唐人屋敷跡に現存する4つのお堂



観音堂（長崎市指定史跡）



土神堂（長崎市指定史跡）



天后堂（長崎市指定史跡）



福建会館天后堂（長崎市指定有形文化財）

唐人屋敷地区の
詳細についてはこちら



<http://www.city.nagasaki.lg.jp/sumai/660000/669001/index.html>

黄檗宗の日本での普及と徳川幕府の支援

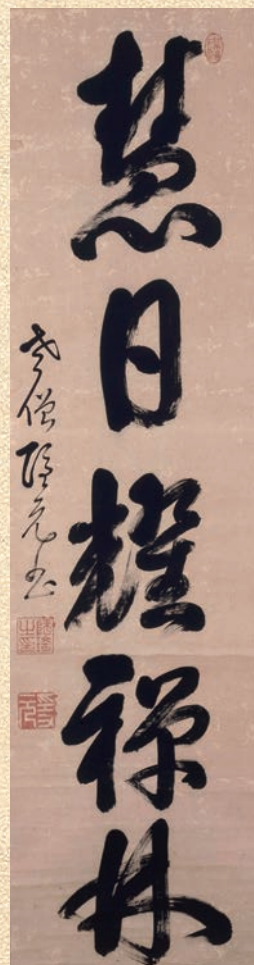
来日から示寂までの20年間にわたり、隠元は黄檗宗の教えを日本に広めることに尽力し続けました。福建省泉州から長崎に渡来した彫刻師の范道生(1635-1670)を京都の萬福寺に呼び寄せ、仏像を造らせたこともあります。隠元は、黄檗宗の戒律を新たに定め、中国仏教の伝統や格式を日本に普及することに努める傍ら、浄土教の作法を禅宗に取り入れた「禅浄双修」という考え方を提唱しました。これは、座禅をしながら心の中で念仏(「南無阿弥陀仏」、現在も、当時の中国の発音「ナムオミトフ」という)を唱えるというものです。仏教の各宗派の思想を融合した隠元の考え方は、日本の仏教界を刮目させました。

黄檗宗は徳川幕府の手厚い保護の下、驚異的な速度で発展を遂げました。黄檗宗の寺院は日本各地に広がっていき、1745年までの百年足らずの間に、総本山である京都の黄檗山萬福寺を除き、その数は1,043カ所にも達しました。

「黄檗文化」伝来の地、長崎

隠元は博学で、詩文の才に長け、能書家としても有名でした。隠元が記した『弘戒法儀』、『語録』、『雲湧集』などの著書は、いずれも仏教界における重要な文化遺産となっています。隠元が日本の思想や文化に多大な影響をもたらした分野は、禅宗の教義だけでなく、建築、文学、音楽、書道、絵画、彫刻、さらには印刷、医学、飲食に至るまで多岐にわたっており、これらは一つの文化体系として「黄檗文化」と呼ばれています。

飲食を例に取り上げてみても、隠元の影響力は計り知れません。隠元が日本にもたらした中国式の精進料理は、動物性の食材を一切使わない点は日本の精進料理と同じですが、油を多用しているため濃厚な味付けで、後に「普茶料理」と呼ばれるようになりました。一つの食卓を上下のへだてなく囲み、各自取り分けて食べる形式にも特徴があります。中国式のこうした食事様式は、「卓袱料理」として長崎に定着していきますが、普茶料理は「卓袱料理」の精進料理版という性格です。



隠元筆
一行書「慧日耀禅林」
(長崎歴史文化博物館蔵)

インゲン豆

隠元が中国から持ち込み、長崎の興福寺で栽培・普及した。

原稿用紙、明朝体

明朝体

また、日常生活の中でよく食べられているインゲン豆、スイカ、レンコン、タケノコ、胡麻豆腐、煎茶なども、隠元一行が日本にもたらしたものです。

そのほか、寺院で使われている木魚をもたらしたのも隠元一行であり、さらに、400字詰め原稿用紙の形式(1行 20字で20行)及び日本で標準的な書体となっている明朝体も隠元が中国から持ち込んだ明朝版の一切経(お経のすべてを網羅した仏教の百科事典のようなもの)が起源であると言われています。

このように隠元らが伝えた黄檗文化は、今の日本に脈々と引き継がれて息づいていますが、その発端が、この長崎にあったのです。隠元が長崎に滞在していたのは、わずか1年余ですが、日本で初めて入った寺院(初登の地)である長崎の興福寺には、今も隠元書「初登宝地」の扁額(表紙の写真)が掲げられ、その言葉は、隠元にとって長崎がどのような意味を持っていたかを物語っています。

唐四ヶ寺

唐人たちは出身地ごとに「村」という同郷団体を組織し、航海安全のための媽祖を祀っていた。その後、禁教下において、それぞれ同郷の唐僧を中心に禅寺に発展し、隠元禅師渡来後は、正式に黄檗寺院となった。また、唐寺は、明末清初の中国の最新文化を受容・発展する基地であり、唐貿易にも深く関わっていた。



左上／東明山 興福寺(別名：南京寺)

1620年に建立された日本最古の黄檗禅宗の唐寺。写真の「大雄宝殿」は国指定重要文化財。

右上／聖寿山 崇福寺(別名：福州寺)

1629年建立。国宝「大雄宝殿」、「第一峰門」に加え多くの文化財を所有。毎年旧暦の7月26日～28日には、黄檗の雰囲気を感じられる中国盆会(ぼんえ)が行われる。

左下／分紫山 福濟寺(別名：漳州寺、泉州寺)

1628年建立。かつての国宝「大雄宝殿」などは最高の黄檗寺院建築を誇ったが原爆で焼失。現在の建物は戦後に再建されたもの。(長崎歴史文化博物館に戦前の模型がある。)

右下／万寿山 聖福寺(別名：広東寺 ※そう呼ばれたのは、近代以降)

1677年に建立された黄檗宗総本山萬福寺(京都宇治)の様式を取り入れた寺院。



普茶料理(興福寺で供される普茶料理)(写真：興福寺)

長崎で花開いた絵画の世界

明末清初の画壇は、徐々に二大流派に分離していきました。一つの流派は、宮廷画家等の先人の継承を重んじた、硬直な輪郭線を用いた院体画風のもので、もう一派は、文人画の伝統を創作の源泉とする画派で、筆意や墨色を重視しました。それぞれ北宗、南宗と称されるようになり、次第に南宗系の画家が重んじられるようになっていきました。一方、同時期の日本の画壇を席卷していたのは狩野派で、古典的な絵画を得意とし、江戸幕府や大名等の御用絵師を務めるなど圧倒的な勢力を誇っていました。

このような時代背景にあって、日本の絵画に新しい風を吹き込み、日中文化交流の歴史に重要な役割を果たしたのも隠元禅師でした。隠元が伝えた黄檗宗では、禅僧思想家以外にも書画や彫刻において秀でた大家を輩出し、彼らが伝えた最新の中国文化は、当時の日本社会から大いに注目されました。特に、中国の伝統的な細密描写に加え、イエズス会の宣教師らが中国にもたらした西洋の陰影法も取り入れた隠元ら高僧の肖像画(頂相)は、驚きをもって日本で受け入れられたと考えられます。また、傑出した画家としては、隠元の日本招聘にも尽力した逸然性融(1601-1668)が知られています。

逸然は、中国浙江省杭州の出身で、はじめは貿易商として来日しましたが、後に出家して、長崎の興福寺の三代住持になりました。彼の筆は極めて繊細で、黄檗派の道釈人物画に学んだ、奇怪な観音像や羅漢像を数多く描きました。逸然の画風は、長崎奉行の初代御用絵師兼唐絵目利の渡辺秀石や河村若芝などを通じて、その後の長崎画壇に受け継がれ、彼は、長崎の唐絵(漢画)の開祖として位置づけられることとなりました。

日本では中国文化が尊ばれ、大名らにとってのステイタスの象徴として、その名品が蒐集の対象となっていました。将軍徳川吉宗は、特に宋・元時代の絵画を欲していたことから、唐船主は、中国で手に入れようとしたことが、中国本国でも入手が困難であったため、沈南蘋(沈銓)(1683-1760頃)が招聘されたといえます。

浙江省呉興生まれの沈南蘋は、画壇の大家胡湄(出生・死亡年不詳)に師事し、その腕を磨き、花鳥画、獣画に優れていました。中国では、多くの文人たちとも交流を持っていたことが、残された詩文集等からうかがえます。

沈南蘋は、1731年に南京船に乗って長崎に渡り、1733年に帰国しました。長崎での滞在は、わずか2年足らずで、滞在期間中に、彼



逸然筆、即非賛「白衣大士觀瀑圖」1665年(長崎歴史文化博物館蔵)



中／沈南蘋(沈銓)筆「麒麟図」1749年(長崎歴史文化博物館蔵)
右／熊斐筆「梅花双鶴図」18世紀(長崎歴史文化博物館蔵)

から直接学ぶことができたのは、長崎の画家熊斐(1712-1772)のみでした。沈南蘋の作品は、伝統的な花鳥画の構図の中に写実的な鳥や獣を配置したもので、復古主義的な北宋花鳥画の空気を湛えた秀作として、帰国後、次第に日本での人気を獲得していきました。それどころか、当時の日本の画壇では沈南蘋の作品を手本にすることがブームにさえなったのです。また、沈南蘋の来日は、自由な貿易や対外的な人の往来が制限されていた日本にあって、中国のプロの画家から直接指導を受けることが出来た稀有な機会ともなりました。

そのほかにも、中国やオランダの風俗を描いた長崎古版画は、蘇州版画からも影響を受けたものであることが知られています。また、長崎に往来した中国商人(唐人)たちが描いた余技の絵画は、南宗系の文人画として高く評価され、日本各地の文人たちは、長崎を訪れ、唐人たちとの風雅な交友の機会を求めました。

17世紀以降、鎖国下にあっても、長崎を窓口として中国から伝わった絵画や画法は、同時に、西洋の絵画の影響も受けながら「長崎派」と総称される独特の展開を見せていきました。このような外来文化が伝播する過程には、私たちには想像もできない程の数々の出会いによる驚きや感動があったことでしょう。



孫文と梅屋庄吉～国境を越えた厚い友情の物語～

「君は兵を挙げよ。我は財を挙げて支援す。」長崎出身の青年実業家 梅屋庄吉は、若き中国の革命家 孫文に、こう語りました。

1895年、ともに義侠心に富み行動力を有する二人は、香港で運命の出会いを果たします。孫文29歳、梅屋27歳。この出会いは、若いふたりの運命を変えただけでなく、後の中国の運命をも変えることとなるのです。

「一切口外シテハナラズ」という庄吉の遺言により、これまで秘密にされてきた二人の厚い友情の物語は、近年、両国の友好の証として注目を集めています。

孫文の生い立ち

1866年11月12日（旧暦では10月6日）、孫文は広東省香山県翠亨村（現中山市）の農家に生まれました。貧しさのため靴を履くことができず裸足で歩き、幼い頃の主食は甘藷（サツマイモ）だったそうです。こうした幼少期の貧しい農村生活体験が、孫文の40年間にわたる革命活動の背景となっていました。

1878年、13歳だった孫文は、ハワイ・マウイ島で事業を成功させ、有名な華僑資本家となった長兄・孫眉を頼ってハワイへ渡り、5年間勉学に勤しみ優秀な成績を収めました。この5年間の生活の中で、アメリカの民主主義の考え方やキリスト教の教えに触れるうちに、祖国を変えたいという思いが強くなっていった孫文。帰国後、1884年4月、中央書院へ入学、2年後に卒業した孫文は医者を目指します。1886年、まず広州の医学校へ入学し、翌年に香港・西医書院へ転学しました。

ここで、孫文は外科の主任教授ジェームス・カントリー博士と出会います。彼は孫文の良き理解者であり、のちに永遠の友となる梅屋庄吉と孫文を結ぶ立て役者となった人物です。

孫文を革命の道へと導いた地、香港

香港は、孫文の革命思想が芽生えた地であり、辛亥革命の主な根拠地となった場所です。孫文が香港で過ごした8年間は、孫文の革命思想を育む大切な時期でした。孫文は後に香港で過ごした日々をこう語っています。「私の思想の発祥地は香港である。30年前香港で勉学に励んでいた時、暇になると街を散歩していた。清潔で整然とした通り、高層ビル、そして香港の人々の仕事の効率の良さは、深く私の脳裏に焼き付いた。」

孫文はマカオから広州に帰った後、双門底で医者として開業し、後に西関の洗基巷で漢方薬と西洋薬を売る薬局を開きました。孫文の医療技術は非常に高く、すぐに人々の知るところとなりました。その後、彼は博濟医院で医者をしていた伊文楷とともに「杏林（医療界）の二大巨頭」と並び称されました。

しかし孫文は、「人の治療」よりも、今差し迫って重要なのは「国の治療」であると考えました。そこで1893年、孫文は、陸皓東、尤列、鄭士良、程璧光らと広州南園の抗風軒で「満州人を追い払って中華を復興させる」という救国の大事を画策したのです。1894年6月には陸皓東と天津へ出向き、当時、北洋大臣であった李鴻章宛てに自身が考える富国強兵策の意見書を提出しましたが、受け取ってもらえず、「反清救国」の意思を固めることとなり、1895年2月、香港に興中会の本部が創立されました。

梅屋庄吉の生い立ち

1868年11月26日（旧暦）、梅屋庄吉は長崎に生まれてまもなく、遠い親戚に当たる梅屋吉五郎・ノブ夫婦の養子となります。養父・吉五郎は、長崎市内で「梅屋商店」を構え、貿易業や精米所を営んでいました。

庄吉の自伝「わが影」によれば、梅屋商店のすぐそばには、長崎土佐商会有り、後に三菱財閥を築く岩崎弥太郎がその実務を取り仕切っていました。弥太郎は、幼い庄吉を背負って遊んでくれたこともあったといいます。

江戸時代以前から海外に開かれ、異国の人や文化を受け入れてきた国際都市長崎で生まれ育った庄吉にとって、

中国の人は、いわゆる外国人というよりも、共に生活する良き隣人という存在だったのです。

また、幼い頃から好奇心旺盛で行動力があった庄吉は、若干14歳にして、両親に内緒で梅屋商店の持ち船に乗り込み、上海へ向かいました。庄吉は、このときから、日本と大陸との懸け橋となる人生を歩み始めていたのです。

当時の上海は、アヘン戦争（1840-42）で清国がイギリスに敗れた結果、欧米列強から開国を強いられ、進出した欧米資本の下で国際都市として急速な発展を遂げていました。庄吉の目には、西洋文明がもたらした上海の繁栄がまぶしく映っていたようです。ただし、その陰で虐げられていた現地中国の人々の姿も目にしたことでしょう。

1886年、19歳になった庄吉は、欧米列強について学ぼうと留学を決意し、船でアメリカを目指します。しかし、フィリピン沖でコレラに感染した中国人出稼ぎ労働者3人が生きたまま袋に入れて海に投げ捨てられる場面に遭遇します。アジア人を人間と考えるない当時の欧米人の行動を目撃した庄吉は、強い怒りとともに、西欧列強に屈することなくアジア人同士が協力してアジアの平和と解放を勝ち取らなければならないと固く決意したといえます。

孫文と長崎

孫文と長崎との間には深い関係がありました。

孫文は、58年の生涯のうち、10年近くを日本国内で過ごし、1897年11月から1924年11月までの27年間で計9回も長崎を訪れ、福島屋旅館（現・長崎市万才町）のようなひいきの宿もありました。彼は、時の政権に追われる「お忍び訪問」か、公式訪問かを問わず、長崎を経由して出入国をしていました。孫文の革命運動が展開された当時、中国と日本の往来に上海～長崎間に定期航路が設置されるなど、海の玄関口となっていた長崎は、まず地理的な条件から、孫文と深いつながりを持つことになったのです。

1913年の公式訪問で長崎を訪れた孫文は演説をしています。このとき、かつて17世紀の明清交代期に長崎やってきた隠元禅師らによってもたらされた黄檗文化が日本で開花したこと、「抗清復明」を旗印とした鄭成功が長崎県ゆかりの人物であることなど、長崎と中国との間に「密接なる歴史関係」があることを紹介し、アジアの将来のために日中両国の「同盟締結」を訴え、長崎在住の華僑には日中友好・交流の架け橋となることを求めました。

孫文にとって長崎は、地理的に身近だけでなく、梅屋庄吉に代表される人脈面、歴史的にもなじみ深い存在で、革命への貢献を期待した都市だったのです。

賢母の羽織

梅屋庄吉の遺品。梅屋夫妻の無私の援助に感激した孫文が、感謝の意を表すために梅屋庄吉愛用の羽織の裏地に「賢母」の二文字を揮毫したものと考えられている。（孫文筆 所蔵：小坂文乃氏）

孫文・梅屋庄吉と長崎に関する詳細情報はこちら



<http://tabinaga.jp/sonbunumeya/index.html>

孫文と梅屋庄吉、必然的な運命の出会い

1895年3月、孫文(29歳)と梅屋庄吉(27歳)は香港で出会いました。二人の共通の知人であるイギリス人医師のジェームス・カントリー博士が引き合わせたのです。国を憂い、未来を切り開こうとする情熱をもつ二人の青年に共通したものを感じたのでしょう。

香港で写真館を経営していた梅屋庄吉は、孫文が同じ志を持っていることに感銘を受け、古くからの知り合いのように意気投合しました。そして「君は兵を挙げたまえ、我は財を挙げて支援す」という盟約を結び、生涯その誓いを貫き通すこととなります。

1895年10月の広州起義にあたっては、梅屋が密かに600丁の拳銃を購入、調達しようとしました。また、蜂起が事前に発覚・失敗し、孫文が清朝政府に追われて避難する際にも梅屋が避難場所を提供しました。

そして、1913年、第二革命に失敗し、再度亡命を余儀なくされたときにも、再び梅屋が避難場所を提供しました。孫文の革命活動は、1895年の広州起義以来、挫折の連続でした。連戦連敗を重ねながらも決して諦めずに戦い続ける彼の背後には、絶えず梅屋庄吉の姿がありました。

魂の絆 ～孫文・宋慶齡と梅屋庄吉・トク、信頼と尊敬で結ばれた4人の友情物語～

1915年、日本に亡命中だった孫文と宋慶齡との結婚を後押ししたのも梅屋庄吉・トク夫妻でした。亡命中の孫文の秘書をしていた宋慶齡が日本から中国へ帰国した後、意気消沈する孫文の様子から、宋慶齡に対する彼の愛情が本物であることを見抜いたのは庄吉の妻・トクでした。27歳差という親子ほどある年齢差に加え、革命活動の最中であることなど革命関係者のほとんどが反対するなか、トクは宋慶齡を再度日本へ呼び寄せ、梅屋夫妻による支援のもと、10月25日に東京で結婚をします。結婚披露宴は東京の梅屋邸で催されたといわれ、新生活のための家財道具調達などはトクが率先して行いました。

梅屋庄吉・トク夫妻は、孫文の革命活動だけでなく、心の面での支援も行っていたのです。こうした経緯から、梅屋トクと宋慶齡の2人の妻の間にも、夫同様の強い絆が結ばれ、宋慶齡の梅屋夫妻に対す

長崎市旧香港上海銀行長崎支店記念館
長崎近代交流史と孫文・梅屋庄吉ミュージアム(国重要文化財)
旧香港上海銀行長崎支店。現在は、長崎が日本の近代化に果たした役割や、孫文と梅屋庄吉との国境を越えた厚い友情とその功績について紹介している。

孫文と梅屋庄吉・トク夫妻像(三人像) (松が枝国際観光船ふ頭緑地)

梅屋庄吉が中国へ贈った4体の孫文像の返礼として、辛亥革命100周年にあたり、中国政府から寄贈された。(2011年10月)



長崎市旧香港上海銀行長崎支店記念館
長崎近代交流史と孫文・梅屋庄吉ミュージアム

住所：長崎県長崎市松が枝町4-27
開館時間：9:00～17:00
料金：一般300円、小中学生150円
休館日：第三月曜日(祝日の場合は翌日)
電話番号：095-827-8746
日本語ホームページ：http://www.nmhc.jp/museum/



る心からの感謝の気持ちは、戦後も消えることはありませんでした。

戦後、慈善活動などの功績から「中国の良心」と呼ばれ、中国政府の要人となった宋慶齡は、「梅屋さんの娘が生きていたら会いたい。元気うちに会いたい。」と言って梅屋夫妻の娘・千世子に招待状を送ったのが1975年。その3年後の1978年、千世子の訪中が叶って再会を果たします。千世子が記念に贈った写真に対する宋慶齡からの返礼の手紙には、「夫婦2組の友情を消せるものはない」という力強い言葉が記されていました。

中国「革命の父」と称され、世界に名を残した孫文。彼と同じ夢を抱き、アジアの発展と平和のためにともに戦った梅屋庄吉。そして、時代を奔走する二人を慈愛でつつむように支えたふたりの女性、宋慶齡とトク。彼ら4人は、それぞれに強い絆で結ばれていたのです。

「4体の孫文銅像」と「孫文と梅屋庄吉・トク夫妻像」

孫文の革命に対するまっすぐな思いに共鳴し、その理想を深く理解していた梅屋庄吉。香港で二人が初めて出会ってから30年もの長きにわたって、梅屋は孫文を物心両面で支援し続け、映画事業で成した巨万の富を惜しげもなく提供し、それに対して一切の見返りを求めませんでした。

1925年、孫文は逝去します。落胆のあまり茫然自失の状態が続いた庄吉でしたが、周囲の人々の支えもあって、失意を振り払うかのように孫文の偉大な業績を後世の人々に伝えようと行動を始めます。残った私財を投げ打って4体の孫文銅像を製作し、中国に贈ったのです。今でも、これらの銅像は広州、南京、マカオの各地で大切にされ、すべて完全な形で保存されています。

そして、辛亥革命100周年を迎えた2011年10月、「孫文と梅屋庄吉・トク夫妻像」が中国政府から長崎県に寄贈され、長崎市内の松が枝国際観光船ふ頭緑地に設置されました。

孫文と梅屋庄吉との友情は、時代と国境を越えて今なお人々に伝わり、賞賛されています。そしてこの友情はまさに長崎と中国との友好の交流の縮図でもあります。日本人と中国人が同じ夢を抱き、アジアの発展と平和のために共に努力した証なのです。

革命志士寄書衝立

梅屋庄吉と交流した中国革命志士たちが寄せ書きした衝立。
(125×116×27cm) 揮毫：居正・胡漢民・陳其美ほか
所蔵：小坂文乃氏



福建会館・孫文像(館内町)

長崎華僑の集会所で、孫文は1913年3月に華僑主催の歓迎午餐会で福建会館に足を運んでいる。辛亥革命90周年を迎えた2001年に日中友好のシンボルとして上海市から長崎県へ寄贈された「孫文像」が建立された。



真言密教を開いた遣唐使、空海

空海(くうかい) [774-835]

平安時代初期の日本の僧で、真言宗(密教を中心とした宗派)の開祖。804年に遣唐使の留学僧として入唐。福建省寧徳市霞浦県赤岸鎮に漂着し、長安に向かう。長安では、西明寺に居住しながら、青龍寺の恵果和尚に師事し密教の奥義を伝授される。806年8月に帰国の途につき、816年に高野山を下賜され開創。921年には、醍醐天皇により弘法大師の諡号を与えられる。能書家としても知られ、嵯峨天皇・橘逸勢と共に三筆(優れた書家のことを表す)の一人に数えられている。

平安時代初期、密教を初めて本格的に伝えた人物として、日本仏教界の重要人物の一人とされる空海。日本において、いまなお「お大師様」と呼ばれ親しまれる彼が伝えた密教の教えは、9世紀初頭に唐からもたらされたものでした。遣唐使たちが最後に見た日本の風景・五島(長崎県)。目の前に広がる大海原を眺めていると、空海が残した「辞本涯」(日本の最果てを去る)という言葉が心に響きます。

遣唐使旅立ちの国境の島

630年から838年にかけて、朝鮮など東アジアの情報を収集し、唐の進んだ制度や文化などを学ぶため、使節団(遣唐使)を派遣していた日本。空海も、804年の遣唐使船に乗って、五島から唐へと渡り、最新の仏教の教えを学んで帰国しました。

空海ゆかりの地と日本遺産

806年8月に帰国の途についた空海ですが、途中、五島市玉之浦の大宝港に寄港し、大宝寺に滞在したといわれ、その際、大宝寺が真言宗に改宗したことから、「西の高野山」と呼ばれています。

このほか、2015年4月に、日本遺産の構成資産として登録された「明星院本堂」のある明星院は、806年に空海が唐から帰る途中に籠もり、明星庵と名付けたと伝えられているお寺で、本堂の格天井に描かれた121枚の花鳥画は必見です。

このように、遣唐使船の日本で最後の寄港地だった五島には、遣唐使や空海ゆかりの地が島内各所にあります。彼らが出発のために風待ちをし、航海安全の祈りを捧げた地をぜひ訪ねてみてください。

福建省寧徳市霞浦県のゆかりの地

804年8月10日、空海は寧徳市霞浦県赤岸鎮に到着し、41日間滞在し、その後、福州市から浙江省経由で西安へ向かったと考えられています。現在、霞浦県には空海記念堂、空海漂着記念碑、蔡海亭、大門が建てられており、また、1988年に空海研究会が設立され、空海の霞浦県から長安への行程等の調査、日中の文化交流、日本から訪問する信者の接遇などの活動を行っています。



福州開元寺(ふくしゅうかいげんじ)

福建師範大学付近にある空海が入唐後、最初に入った寺院。現在、空海の銅像が建っており、日本人観光客等が訪れている。



空海記念堂(くうかいぎねんどう)

中国側が土地を提供し、日本の高野山金剛峯寺が1994年に建立した記念堂。現在は寧徳市霞浦県旅遊局が管理者。霞浦の新幹線駅から歩いて5分の便利な場所に位置する。



祭海亭(さいかいいてい)

日本の高野山金剛峯の寄附で、空海の上陸地に長安まで続く空海ロードの起点として建てられた東屋(あずまや)。日本の真言宗関係者が霞浦県を訪れた際は、祭海亭で読経することとなっている。



●三井楽(みみらくのしま)
(五島市三井楽町)

三井楽(みいらく)は遣唐使船の日本最後の寄港地で、『蜻蛉(かげろう)日記』などの古典文学では、日本の西の果てにあり、亡くなった人に出会える「みみらくのしま」と読まれた。



●日島(ひのしま)の石塔群
(新上五島町日島郷字曲)

各地の石材で造られた石塔が海辺に建ち並ぶ。海上交易の要衝だったことがしのばれる。



遣唐使ふるさと館
(五島市三井楽町濱ノ畔3150-1)
(写真:長崎県観光連盟)



白良ヶ浜万葉公園
(五島市三井楽町濱ノ畔)
園内には万葉ゆかりの草花が植えられ、遣唐使船を模した展望台がある。(写真:長崎県観光連盟)



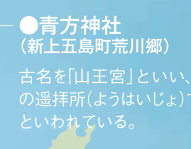
●御船(みふね)様
(新上五島町今里郷)

無事に帰国した遣唐使船の「願解き」をしたと伝わる場所。船の形をした自然石。



●ともじり石
(新上五島町相河郷)

遣唐使船に係留したと伝わる石。



●青方神社
(新上五島町荒川郷)

古名を「山王宮」といい、山王山の遥拝所(ようはいじょ)であったといわれている。



●姫神社跡
(新上五島町青方郷)

遣唐使船の航海安全を祈願した神社の跡。江戸時代に相河(あいご)地区へ遷座された。

●山王山
(新上五島町青方郷)

遣唐使船で唐へ渡った最澄(天台宗の開祖)が、帰国後、入唐成就のお礼に開いたとされる山。

●明星院本堂(五島市吉田町)

空海が唐から帰還した際に立ち寄り、お籠りになったと伝えられる寺。本堂の格天井には、狩野派画家が描いた花鳥画がある。



大宝寺
(長崎県五島市玉之浦町)



「西の高野山」と呼ばれている空海ゆかりの寺。(写真:五島市)

●ともづな石
(五島市岐宿町川原)



遣唐使船が流されないよう「とも綱」を結わえたとされる石。



五島うどん

遣唐使により大陸から伝わったといわれており、細くて、コシが強く、五島の特産品・椿油を使用しているのが特徴。(写真:長崎県観光連盟)



日本遺産とは

「日本遺産(Japan Heritage)」は、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産(Japan Heritage)」として文化庁が認定するもの。

●=日本遺産構成文化財

日本遺産 国境の島「壱岐・対馬・五島」のホームページ <http://kokkyonoshima.com/story>

「福州開元寺」にある空海の銅像

長崎と中国 人と文化の交流譚

江戸時代、長崎港には多くの中国船が入り、長崎の人々は中国からやってきた人を、親しみを込めて「唐人さん」とよんでいました。そして、その思想や知識、芸術や文化、建築技術などを受け入れ、生活や風習にも影響を受けました。長崎の街中では今でも、船の守護神である媽祖や関帝(関羽が神格化されたもの)など、中国の文化を見ることができます。現在、これほどまでに中国色あふれる多彩な文化が、街や暮らしのなかに根付いているところは長崎以外にないでしょう。中国の影響や雰囲気が色濃く感じられる長崎。これまでの歴史の積み重ねのなかで「唐人さん」と深く交流しながら、独自の長崎文化を築いてきました。ぜひ長崎県と中国の交流の歴史と、そこに育まれた長崎文化を体験してください。

■長崎の孔子廟をめぐる物語

中国で学問の神様として祀られる孔子。彼を始祖とする思考・信仰の体系である儒教は仏教の伝来よりも前、5世紀頃に日本に伝えられたと言われており、その後日本では、儒学という学問として根づいていきます。儒学の最盛期は江戸時代で、当時、武士階級を中心に広まっていた。

長崎においても、1676年、儒学者向井元升が立山書院という儒学の聖堂(中国で孔子を祀った聖廟(孔子廟)を意味する)を開き、その後、1711年、彼の子である元成^{げんせい}が長崎聖堂(中島聖堂)を設立。この長崎聖堂は、儒学教育のほかに、中国貿易でも重要な役割を果たしていました。当時の貴重な書物や歴史的な資料は、現在、長崎歴史文化博物館に収蔵されています。

当初は長崎奉行所の保護があったため、大成殿(本殿)、大学門など多くの建物を備え、長崎居住の中国人も参拝していたということですが、明治維新後、奉行所の保護を失った長崎聖堂は荒廃し、現在は、1959年に興福寺境内に移築された大学門だけが、その遺構として保存されており、跡地には石碑しか残っていません。

1893年には、清国政府の援助を得た長崎の華僑たちが、当時中国人たちが居住していた大浦外国人居住地に孔子廟を創建。こうして、国内唯一の華僑の手による孔子廟が誕生したのです。この建設には、長崎の職人たちが関わりました。職人の中には、外国人居留地に建てられた洋風建築にも関わっていた者もあり、世界の様々な地域の技術に触れる機会に恵まれていたという点で、やはり長崎独特の地域性が感じられます。

しかし、1945年8月9日、一発の原子爆弾により、この孔子廟も被害を受けることとなります。その後、何度か改修を重ね、中国山



長崎孔子廟(写真:長崎孔子廟)



長崎孔子廟・中国歴代博物館
(写真:長崎県観光連盟)

東省にある孔家の廟に倣った本格的な造りの建物が再建されたのです。この頃から、中国文化を紹介する観光名所として、新たな役割を担いはじめた長崎の孔子廟は、1983年、中国政府の協力により、石像が運ばれ改装。中国歴代博物館も併設されました。

この博物館には、文化的価値の高い中国の国宝級文物が常設展示されており、このような博物館は、中国国外ではなんと世界中で長崎だけなのです。ここでも、長崎と中国が長きにわたる交流の中で培ってきた特別な絆を垣間見ることができます。

このほか、現在では、旧正月を祝うランタンフェスティバルや孔子の生誕を祝う孔子祭など、様々な祭事の会場にもなっており、大事な文化交流の場として利用されています。

■幕末大きな転換期を迎えた長崎は近代華僑発祥の地

幕末の1859年、3隻の唐船が長崎に来航し、唐人屋敷に滞在していました。唐人屋敷(唐館)は、オランダ人たちが住まわせていた出島と同じように、貿易で来日した唐人たちの長崎滞在の場所だったのです。このころ、中国では清朝打倒の動きが起こり不安定な状況が続いており(1850-64 太平天国の乱)、また、アヘン戦争以降、諸外国の勢力がはびこるなど混乱を極めていました。このような状況下で、3隻の唐船は帰国しても安定した貿易取引ができる状況ではありませんでした。

そこで、唐船主の紐春杉は、唐人屋敷に滞在できるよう長崎奉行所に嘆願。その願いは聞き入れられ、船員の家族なども呼び寄せ約1000人が唐人屋敷で生活を始めました。この在留のちに長崎定住のきっかけとなり、近代の長崎華僑のルーツになりました。

その後、幕府は1859年に長崎、横浜、箱館(現在の函館)の3都市を開港し、アメリカ、イギリスなどの諸外国との貿易を開始しました(安政の開国)。造成された大浦居留地には、欧米商人とともに香港・上海などから貿易商が来崎しましたが、このとき中国は日本と条約を結んでいなかったため、1871年の条約締結まで名義上欧米貿易商附属のかわりで活動しました。

1868年、唐人屋敷の機能は停止し、1870年には火災で建物も焼失してしまいました。これにより、唐人屋敷在留の中国人らは生活・活動の場を新地や大浦居留地へと移しました。その後、中国人の貿易商社は新地に集まり、新地は経済活動の中心地となったのです。

しかし、1930年代以降、貿易会社を経営していた広東や三江(江蘇省、浙江省、江西省)出身者のほとんどは本国へと引き上げていきます。一方で、飲食業などを営んでいた福建省福州・福清出身者は長崎へ留まる者が多くいました。彼らは、戦後も行商や飲食業などで生計を立て、今でも長崎華僑のほとんどを福建省出身者が占めています。

こうして、新地には中華料理店や雑貨店などが立ち並び、1986年、中国門が建設されると、より中華風の外観に改装した店舗が軒を連ね、現在の新地中華街が完成し、観光名所の一つとなりました。

■長崎名物“ちゃんぽん”を通して知る長崎と中国との交流秘話

長崎といえば“ちゃんぽん”を連想する人も多いのではないのでしょうか。白濁の鶏ガラと豚骨のスープ、コシのある太い麺、そして魚介やキャベツ、もやし、ピンクや緑のかまぼこなど、色とりどりの具材たちが仲良く一つの皿の中で調和する姿は、まるで多文化が共生している長崎のまちそのものを表しているようです。海の幸、山の幸が豊富にそろった長崎だからこそ完成した麺料理“ちゃんぽん”。実は、ここにも華僑と長崎人の知られざる絆の物語がありました。ここで、本題に入る前に、まずはちゃんぽん誕生にまつわるエピソードについてご紹介します。

長崎生まれの中華料理ちゃんぽんは、中国福建省から長崎へやってきた陳平順^{ちんへいじゅん}によって考案されたと言われています。1892年、19歳の時に身一つで長崎にやってきた平順は、7年間こつこつと資金を貯め、1899年、26歳のときに、レストランと旅館を兼ねた「四海樓清国御料理御旅館」をオープンしました。



長崎孔子廟
http://nagasaki-koushiyou.com/



長崎新地中華街

自身も異国で苦労した平順は、中国から渡航してくる華僑や留学生の身元保証人を買って出ていました。自らが受けた善意を次に渡していきたいという思いからでした。貧しい学生たちに、安くて栄養価が高くボリュームのある食べ物を食べさせたいと考えた平順。そこで考え出したのが、「湯肉糸麵」や「炒肉糸麵」など故郷の麵料理を長崎の豊富な食材でアレンジした料理“ちゃんぽん”だったと言われています。

平順が店を構えてから33年後の1933年、長崎県の五島から四海樓に働きにきた一人の少年がいました。名は、大浦仁助といいました。はじめは雑用や出前が主な仕事でしたが、16歳になると、料理人になるべく平順に弟子入り。懸命に働く仁助と平順の間には、いつしか親子のような絆が生まれます。そして、修行を終えた仁助が四海樓を出るとき、平順は、“中華料理人證明書”^{しょうめいしょ}を贈りました。日本人が中華料理を習うような時代ではなかったため、このお墨付きは役立ったといえます。平順の熱き親心が感じられる暖かいエピソードです。



最後に、諸説ある語源のうちの一つをご紹介します。

当時、華僑どうしの挨拶の言葉は、お互いの食生活を気遣い、「チーファンラマ(ご飯は食べましたか?)」だったといえます。福建語で“ご飯を食べる”は“呷飯(シャボン)”。この言葉を聞いた長崎人の間で、彼らの食べていた麵料理をさすものとして“ちゃんぽん”が広まったということです。

■モダン都市・長崎、今も残る異国の足跡

安政の開国(1859)後、上海を拠点にした多くの外国商社が長崎に進出し、外国人居留地に事務所や住居を構えました。

開国後、大浦地区の海岸通り一帯は居留地の一等地として、各国の領事館、ホテル、商社、銀行などが立ち並びました。現在も保存活用されている香港上海銀行長崎支店の建物は、1904年竣工。外国貿易省が利用する銀行として、ロンドン、上海、香港での外貨売買などの取引を担いました。現在は、「長崎近代交流史と孫文・梅屋庄吉ミュージアム」として活用されています。このほか、上海の英国人技師の設計による英国領事館(1908年竣工)も当時の姿をいまに残しています。

西洋風の建物群は、異国情緒あふれる街並みを形成し、上海バンド(バンド：埠頭、湾岸地域のこと)に似た長崎版バンドが出現しました。清国領事館も1878年、大浦バンド(現在の長崎市常盤町)に開設されています。

1893年には、大浦地区に孔子廟が創建され、一帯には中国人商社も多くありました。

■長崎－上海航路開設をめぐる長崎の壮大な挑戦

1859年、イギリスの汽船会社が長崎と上海を結ぶ航路を開設。その後、アメリカの郵船会社も横浜－上海間の定期航路を開設し、明治初期、日本人たちはこれらの船を利用して上海へ渡っていました。

外国の船舶会社が上海と日本をつなぐ航路を寡占するなか、明治政府は日本独自の海外航路の運営を目指しました。1875年、政府の資金援助を得た三菱汽船会社は横浜－上海間に週1回の定期航路を開設。運賃を低価格に設定し、ついに日本が航路を独占することに成功しました。

三菱汽船は、さらなる飛躍を目指し、1885年、国内の共同運輸会社と合併して「日本郵船」を設立。こうして日本最大の海運会社が誕生し、国を挙げた海運業への本格参入の布石ができました。

明治初頭、博多港(福岡)などの貿易取引が増加する一方で、長崎の貿易は低迷していました。危機感をもった長崎の経済人たちは長崎から上海へ向かう定期船を模索しはじめます。1910年、長崎商工会議所は政府に対して長崎－上海の航路開設に関する決議案を提出。東京－長崎間を走る特急列車を、長崎－上海を結ぶ高速船に接続させる大きな計画を提案しました。10年後、政府から許可が下り、長崎－上海航路の実現へと大きく一步前進します。

1923年、日本郵船が長崎－上海間に定期航路を開設。「長崎丸」「上海丸」と名付けられた2隻の高速船が就航しました。長崎－上海間を当時26時間で結んだ2隻は週2回運航し、上海は最も近い外国の都市でした。

上海航路の開設は、長崎市街地の整備や交通機関の充実を促すきっかけとなり、1930年、列車から上海行の船へ

直接接続できるようになり、長崎を経由して東京と上海を結ぶという当初のビジョンが20年越しに叶ったのです。

そして、昭和初期になると、上海から多くの外国人たちが長崎観光に訪れました。1934年には雲仙が日本初の国立公園に指定され、上海航路を利用して雲仙を訪れる欧米人たちの避暑地としてにぎわいました。現在も雲仙のホテルなどには当時の面影が残っています。

長崎市民にとっても上海は身近な街となり、東京に行くより上海へ行く方が経済的で時間もかからなかったことから、「上海へは下駄ばきで」といわれるほどでした。

■「上海ドリーム」を求めて海を渡った長崎人たち

20世紀前半、上海には10万人以上の日本人が暮らし、長崎の人々も多かったといえます。海路で結ばれた異国の地へ、長崎人はビジネスチャンスを求めて渡っていきました。

長崎生まれの白石六三郎^{しろいし ろくさぶろう}もそのうちの一人でした。六三郎は、1868年生まれで、22歳ごろ、上海－香港航路で皿洗いをし、その後、上海に移り住みました。1898年、上海でうどん屋を始めますが、後に、上海随一の日本料理屋「六三亭」^{ろくさんてい}を開業します。1908年には、江湾の一角に6000坪の土地を購入し、「六三花園」^{ろくさんかえん}を造成。茶屋や蓮池葡萄園もあったため、日中の文化人たちが集う場所としても貢献しました。孫文や魯迅^{ろじん}、中国近代書家呉昌碩^{ごしょうせき}などの著名人も六三花園を訪れています。

■長崎と中国、国の事情を越えた「老朋友」の絆

1894年、日清戦争が勃発。中国人への石炭売り止め運動などが起き、1878年に開設された清国領事館は、中国人の保護をアメリカ領事館に託し本国へ引き揚げ、長崎の華僑およそ600人のうち、約半数も中国へ帰国しました。

その後、長崎に留まった華僑約260人に敵意が向けられ始めると、長崎貿易商取締 松尾巳代治^{しょうい じ}は華僑の身の安全と財産の保護などを、大森鐘一^{しょういち}知事に申し出ました。大森知事は、「本邦に在留する清国人民中、この際疑懼^{ぎこ}の念を抱く者これあるやにあい聞こえ候、たとえ日清両国間にいかなる関係あるも、在留華僑人民に対し十分の保護を与うるは当然の儀につき、反目敵視粗暴の挙動これなきよう、あい心得るべし」という声明を発表。華僑の保護と市民に対して自制と良識を求めました。こうして古くからの老朋友たちは長崎に留まることができたのです。

こうした古くから途切れることなく積み重ねられてきた交流の賜の一つに、長崎だけを管轄する駐長崎中国総領事館の存在があります。現在、日本には6つ(札幌、新潟、大阪、名古屋、福岡、長崎)の総領事館がありますが、九州には異例の2か所。同じ九州にある駐福岡総領事館は長崎以外の九州6県及び山口県、沖縄県の合計8県を管轄していることから長崎と中国の交流の重みを感じられます。

1972年10月、日中国交正常化から1か月も経たないうちに、日本の自治体として初めて、当時の久保勲一知事が団長となり、友好訪中団を派遣するなど、全国に先駆けて中国との交流を進めてきた長崎県。現在でも、年に一度、多くのボランティアたちの手により中国人墓地清掃が行われるなど、長崎ならではの草の根交流がつづけられています。



雲仙温泉(写真：雲仙市)



中華人民共和国駐長崎総領事館



中国人墓地清掃

中国より中国を感じられる?! 長崎に溶け込んだ中国の年中行事

現在行われている長崎の祭礼や年中行事の中には中国文化の影響を受けたものも少なくありません。代表的なものとして、中国の旧正月を祝うランタンフェスティバル(春節祭)、清明節、ペーロン大会、精霊流し、崇福寺で行われる中国盆、孔子の誕生を祝う孔子祭、中秋節、長崎くんちなどが挙げられ、ほぼ一年を通じて様々な行事がおこなわれています。



ランタンフェスティバル

このお祭りは、長崎中華街の人たちが、街の振興のために、中国の旧正月(春節)を祝う行事として始めたもので、もともと中国の「春節祭」として長崎中華街でおこなわれていました。1996年からは「長崎ランタンフェスティバル」として規模を拡大し、長崎の冬を彩る一大風物詩となりました。いまでは全国的にも知名度があがり、日本各地からこの光の祭典を見るため、多くの観光客が集まり、街は大いに賑わいます。この祭りは中国での春節から元宵節にあたる15日間にわたって開催されます。期間中は中国の「元宵節」にランタン(中国提灯)を飾る風習に習い、長崎新地中華街をはじめ、市内中心部が約1万5千個におよぶ極彩色のランタンで彩られます。この期間中、街の沿道には「熱烈歓迎」と書かれたのぼりが掲げられ、媽祖行列・皇帝パレード・中国獅子舞など中国色あふれるイベントが市内各所で数多く繰り広げられます。



ペーロン大会

長崎の夏を彩る風物詩のひとつがペーロンです。初夏になると、若者たちが細長い独特の形をした船を漕ぎ、各浦々でその速さを競います。ペーロンの起源は、古代中国・楚の国の「屈原」伝説までさかのぼるといわれますが、長崎には中国南部から東南アジアにかけて、現在でも行われているボートレースがつたわったものと思われる。またその語源は中国語の「白龍(ばいるん)」が転訛したものだといわれています(諸説あり)。長崎での始まりは、1655年(明暦元年)、長崎港に停泊中の中国船の船員たちが、海神を鎮めるためにはじめた競漕とされ、その後長崎の年中行事として定着していきました。その当時は、旧暦5月端午の節句に行われていましたが、競漕に熱中する余り各種の喧嘩沙汰を引き起したため、長崎奉行は、たびたび禁止令を出したそうです。現在のペーロン船は、長さ約13.6メートル、乗員30名以内と統一され、往復1,150メートルをドラ、太鼓に合わせて勇壮に競漕します。長崎近郊の港でおこなわれる予選を勝ち抜いたチームが、毎年7月末「長崎みなとまつり」の期間中に開催される「長崎ペーロン選手権大会」において決勝戦をおこないます。



精霊流し

毎年、お盆の8月15日におこなわれる精霊流しは、西方はるか彼方にあるといわれる浄土に先祖の霊を送る行事です。現在は長崎県内各地でも行われています。その年に初盆を迎える家では、親族や友人らが飾り付けをほどこした精霊船を作り、花火をあげ鐘を打ち鳴らしながら街を練り歩き、故人の御霊を浄土へ送ります。特に長崎市で行われる精霊流しの規模は大きく、その夜は町中が花火の爆音と光につつまれます。その日は故人を偲ぶ様々な趣向をこらした精霊船を見るために、日本全国から多くの観光客が集まります。長崎の精霊流しのルーツは、江戸時代、唐人屋敷の中国人たちがおこなっていた彩舟流しにあるといわれます。長崎で亡くなった中国人の霊を送るために、彩船といわれる小船に食料品や日用品を積んで、港に浮かべた後、燃やしたとされます。また、精霊船を運ぶときに爆竹を鳴らすのは、中国の魔除けに由来するものです。19世紀後半になって長崎港に浮かべることは、禁じられましたが、そのことにより「みよし」とよばれる舳先部分が巨大化し、船も大型化したため、現在では船に車輪をつけて港(流し場)まで押し歩くというスタイルが一般的になっています。



唐蘭館絵巻 唐館図「彩舟流図」川原慶賀筆 19世紀(長崎歴史文化博物館蔵)



中国盆

長崎市にある唐寺 崇福寺では毎年旧暦の7月26日から3日間、長崎華僑の伝統的な祭礼「普度蘭盆勝会(ふどらんぼんしょうえ)」を受け継いでいます。中国福建省出身の華僑組織 三山公祉(さんさんこうしん)によって、先祖を含む亡くなった人すべてを供養する行事で、「中国盆」とも呼ばれています。毎年、県外からも在日華僑が集まり、盛大におこなわれています。現在、中国ではおこなわれなくなった中国盆の風習ですが、長崎ではこうして綿々と継承されています。



(写真:長崎県観光連盟)



中秋節

中秋節は、中国の三大節句(他は春節、端午節)の一つで、旧暦の8月15日です。一年で最も月が美しいといわれる「中秋の名月」にちなんで、日本では月見をします。中国でも農作物の収穫を前に、天と地に感謝し、月のまん丸にあやかって、家族円満を祝います。また、中秋節には家族や親しい友人らと月餅を食べる習慣もあります。長崎新地中華街では、黄色い提灯1,000個を灯し、供え物を飾ってお祝いします。期間中、龍踊りや中国獅子舞、二胡演奏などのイベントも楽しめます。



長崎刺繍

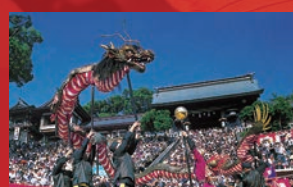
長崎刺繍は、17世紀後半、長崎在住の中国人によって伝えられたといわれる技術です。江戸時代、唐人屋敷が完成する以前、福建出身の中国人たちは彼らが信仰する船の守護神「媽祖像」の下に数く内敷に立体的な刺繍を施していたそうです。それを見た長崎の職人たちが、長崎製の銀細工やビードロなどを用いて長崎独自の豪華さを加えた刺繍を作り上げました。長崎刺繍の特徴は様々な太さの色糸を織って、その質感を変化させることや、縫った色に着色して繊細な濃淡のぼかしを施すことにあります。また、刺繍の下に木綿糸や和紙を入れて立体感を出す「盛り上げ」などの手法が用いられています。長崎刺繍は、諏訪神社の秋の大祭である長崎くんちとは切っても切れない関係にあり、衣装や傘鉾の垂れに装飾として施され、祭りに豪華な雰囲気付け加えています。近年、後継者不足により長崎刺繍の技術は一時途絶えかけののですが、長崎在住の嘉勢照太氏がその唯一の伝承者となり、技術の復活と普及に努められています。氏の技術は高く評価され、2010年に「長崎県無形文化財」に指定されました。現在、氏の作品は長崎くんちにおける船頭衣装や傘鉾の垂れなどに見ることができま



(写真:仁位孝雄)

孔子祭

孔子の生誕(9月28日)を祝うため、毎年秋に孔子廟内で盛大におこなわれる長崎孔子廟の重要な祭典です。1967年に孔子廟が観光施設になった際に始められ、2016年で第49回目を迎えました。華僑が典礼に関する一식을曲阜孔子廟から取り寄せ、昔から伝わる祭礼儀式を本格的に再現したものです。中国獅子舞なども奉納され、多くの観覧者で賑わいます。



(写真:長崎県観光連盟)

長崎くんち

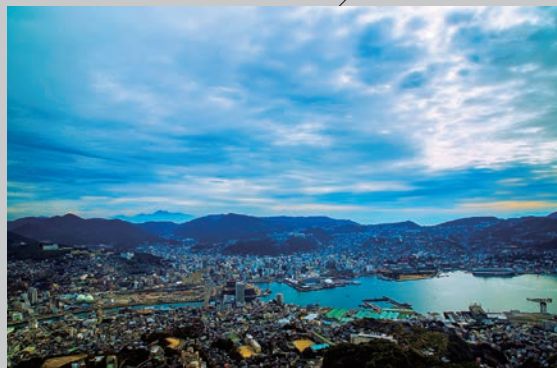
長崎くんちは、長崎の氏神・諏訪神社の秋季大祭です。1634年に遊女の高尾と音羽が諏訪神社神前に「小舞」を奉納したのがはじまりと伝えられており、その後、異国の踊りも取り入れながら数百年をかけて長崎を代表する豪華絢爛なお祭りへと発展してきました。日本三大祭の一つに数えられ、国指定重要無形民俗文化財にも指定されています。中でも龍踊は中国の雨乞いの儀式に起源があるとされ、長崎くんちのハイライトのひとつとなっています。



唐蘭館絵巻 唐館図「龍踊図」川原慶賀筆 19世紀(長崎歴史文化博物館蔵)

長崎市 MAP

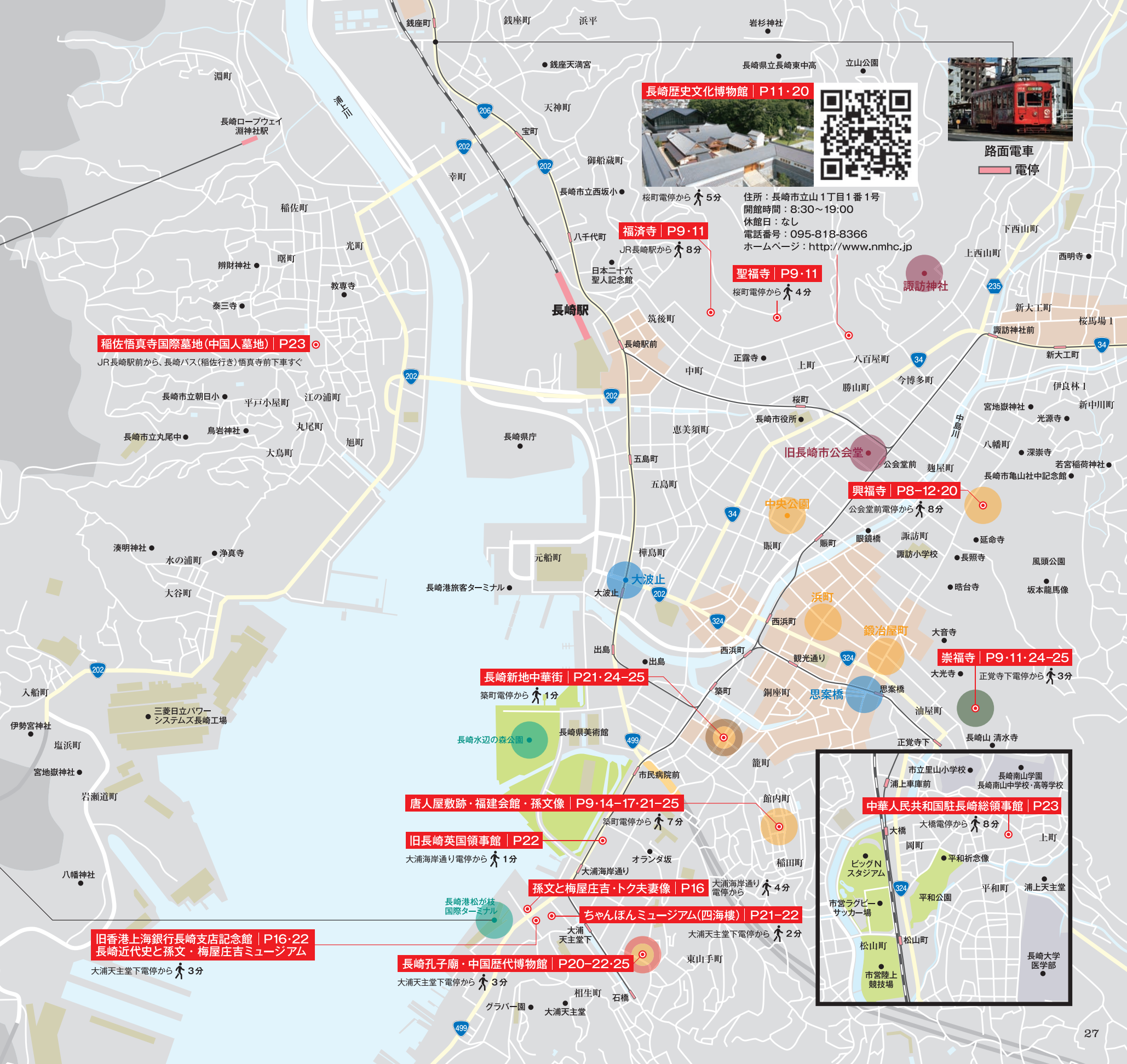
- ランタンフェスティバル | P24
- ペーロン大会 | P24
- 精霊流し | P24
- 中国盆 | P25
- 中秋節 | P25
- 孔子祭 | P25
- 長崎くんち | P25



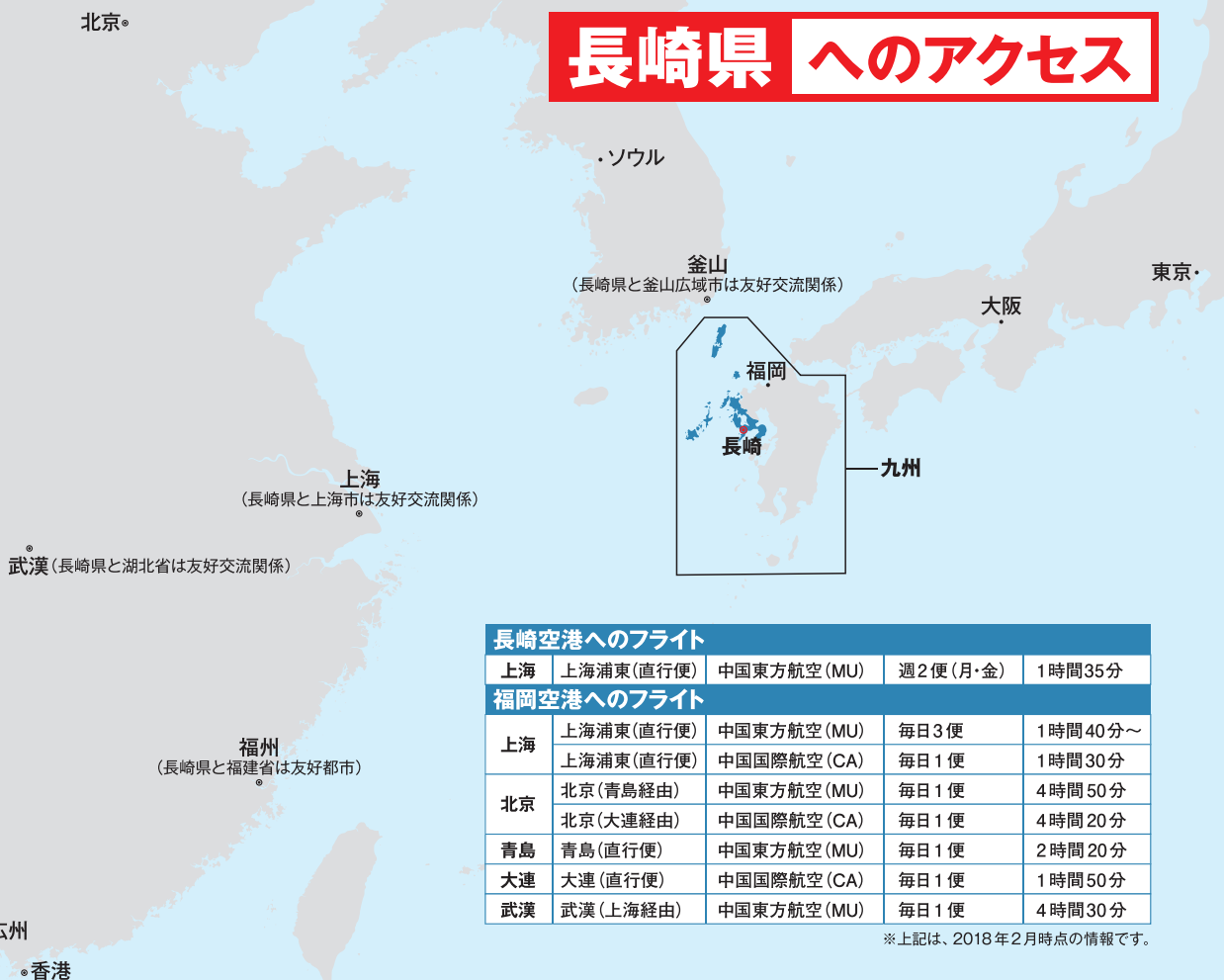
稲佐山展望台からの長崎の風景。



世界新三大夜景に認定された長崎の夜景（その他、香港とモナコ）。写真は鍋冠山から撮影。クルーズ船が停泊しているのは長崎港松が枝国際ターミナル。



長崎県 へのアクセス



長崎空港へのフライト

上海	上海浦東(直行便)	中国東方航空(MU)	週2便(月・金)	1時間35分
----	-----------	------------	----------	--------

福岡空港へのフライト

上海	上海浦東(直行便)	中国東方航空(MU)	毎日3便	1時間40分～
	上海浦東(直行便)	中国国際航空(CA)	毎日1便	1時間30分
北京	北京(青島経由)	中国東方航空(MU)	毎日1便	4時間50分
	北京(大連経由)	中国国際航空(CA)	毎日1便	4時間20分
青島	青島(直行便)	中国東方航空(MU)	毎日1便	2時間20分
大連	大連(直行便)	中国国際航空(CA)	毎日1便	1時間50分
武漢	武漢(上海経由)	中国東方航空(MU)	毎日1便	4時間30分

※上記は、2018年2月時点の情報です。

日本国内の主要都市からのアクセスについて



詳細はこちらをご覧ください
<https://www.nagasaki-tabinet.com/access/index.cfm>

東京から長崎へ

羽田空港→長崎空港……1時間50分～

東京駅→長崎駅 新幹線……7時間～

大阪から長崎へ

大阪国際空港(伊丹空港)→長崎空港……1時間15分

関西国際空港→長崎空港……1時間15分

新大阪駅→長崎駅……約4時間30分

福岡から長崎へ

【JR】博多駅→長崎駅……約1時間50分

【高速バス】福岡空港国際線ターミナル→長崎駅……約2時間30分



長崎県公式微信



長崎県公式微博



長崎県観光連盟
<https://www.nagasaki-tabinet.com/>



本冊子のデジタル版について、
 長崎県上海事務所のホームページ
 上でもご覧いただけます。

※本冊子の記事、写真、イラストなどの無断転載及び複写を禁じます。